

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530699

研究課題名（和文） 40年にわたる生涯的縦断研究における研究者・協力者関係
－両者の体験の質的分析研究課題名（英文） Relationships between researchers and participants in the life-span
longitudinal studies for forty years; Qualitative analyses of the experiences of both sides.

研究代表者

藤崎 真知代 (FUJISAKI MACHIYO)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：90156852

研究成果の概要（和文）：

2つの30年～40年にわたる縦断研究を通して研究者と母親世代協力者・子ども世代協力者が出会い、子どもの5歳時点から行ったノンプログラムの人間関係体験の場（Human Relationship Laboratory(HRL)、通称：中里キャンプ）などにおいてそれぞれの立場で体験したことの意味を自伝的に語り質的分析を行った。その結果、①子どもはあるがままに受容された体験がその後の人生において子育てや仕事における指針となっていたこと、②研究者や母親は、それぞれの枠組みを揺すぶられ見直した経験から、「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」という命題を確信したこと、等が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

Two longitudinal studies were conducted which started when children were five years old at Human relationship laboratory(so called the Nakazato Camp) and lasted some forty years after the camp. Both studies were based on qualitative analyses of the interpersonal experience of children, mothers, and researchers who participated the camp.

The results revealed that (1)Children have internalized acceptive experiences in the camp as a guide of their job and child rearing when they have grown up, and (2) Mothers and researchers became aware that their re-examination of their own frame of references to their lives was co-existent with children's psychological development.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：生涯的縦断研究、研究者・協力者関係、縦断的研究の方法論、質的分析、自伝的

語り、自伝的記述、子ども時代の意味

1. 研究開始当初の背景

人の生涯発達が謳われるようになり、発達過程に迫るべく国内外で多くの縦断研究が行われている（例えば、ニューヨーク研究、パークレー研究、北大グループ研究等）。こうした縦断研究の主たる目的は、研究協力者を第3者的に観察・面接等の調査した資料から発達的变化やその要因に関する客観的な見解を導き出すことであり、研究者・協力者関係について真正面から検討したものは少ない。

エリクソン(Erikson,1982;Erikson et.al.1986)は人生の意義として、①その人が生きているという事実性、②どのように生きているかという現実性、③どのようなコンテクストの中で他の人、社会、歴史にかかわっているかという文脈性、に言及する必要があるという。すなわち、その人が生きているがゆえに起こる周囲との交互性こそが、その人が人生を送る意義ともいえる。

したがって、縦断研究を通じた研究者・協力者関係は、長じるにつれてそこに参加する人々の交互性が重要となり、対等な関係へと変容するといえる(藤崎・古澤, 2008)。ハーマンとケンペン(Harmann;2006/1993)は「心理学者と協力者との関係はより均整のとれた対話へと発展し、協力者は心理的現実の共同構成者ともなれるであろう…」と述べており、本研究はそれぞれの人生に影響をおよぼしあうコミュニティーの形成へと発展する意義について問う独自の研究と位置づけられる。

縦断研究の経過に伴い、研究者・協力者関係はまず親から支援を求められたこと等から親子に役に立つことを中軸におくものへと変化した。その一環として5歳児から日常と異なる時空間（ベッテルハイム(1968/1950)によると子どもが自ら行動するには時間がかかり、且つ、子どもが自分を一番表現できるのは機能が明確でない中間的場である）で子ども自身が一日の過ごし方を決めるノンプログラムの中里キャンプを行ってきた。そこでは、a)スタッフと子どもとの1対1の触れ合いから、b)思春期に子どもが「モルモットでは？」といった疑問をもちスタッフを排除して子ども同士の触れ合いが主に展開した後、c)研究者やスタッフと子どもとの関係は対等な関係へと進展してきた。

こうした関係の変化から、

(1) 意図的に協力者となった親世代は、

そのことを通して実際の親子関係やその後の人生にどのような影響を受けたと捉えているのか、

(2) 必然的に研究協力者となった子ども世代はその事実をどのように受け止め、さらに子ども自身がより積極的な参加者へと移行した心理的变化への影響因は何か、

(3) 子ども世代が長じて親となり子育てをするなかで、どのような影響を受けていると捉えているのか、

(4) 研究者自身も研究協力者との関係やスタッフ間関係のなかで、どのような影響を受けてきているのか、をそれぞれの立場から語り、例えば「子育て・子育ての自伝的再生」(Kalpan,1992)として、事例的に検討する着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、古澤と我々が継続してきた40年余りの2つの母子関係の形成過程に関する縦断研究を通して、次の3点を明らかにすることである。

第1は研究協力児の発達に伴い子どもグループ、中里キャンプのほか、母親グループ等を実施してきたが、親の意志で必然的に協力児となった子どもたちは、長ずるにつれてそのこと自体をどのように受け止め、そのことを通して体験したことをどのように彼ら自身の人生において意味づけているのかを検討する。

第2は意識的に協力者となった親世代、あるいは縦断研究の研究者やスタッフにとっても、そこでの体験がそれぞれの人生にどのように意味づけられているのかを、個別の語り、自伝的手記、およびグループディスカッションの質的分析を通して明らかにし、新たな生涯的縦断研究(古澤, 1995)のあり方を構築する。

これら2つの目的に関連して、研究者・協力者関係は、生涯的縦断研究モデルとして大きく3つの段階に区分されると考える。すなわち、第1段階：研究課題達成のための研究者・協力者関係、第2段階：協力者への支援を考慮した関係、第3段階：それぞれが対等な対話の関係、である。

第3には、生涯的縦断研究モデルを検証した上で、今日の子どもの発達を保証するために、家庭・保育・教育環境における子ども時代体験の質や環境のあり方を具体的に提言し、実践することである。

3. 研究の方法

前述の目的を達成するため、HRLにおけるそれぞれの体験を振り返り、語り、自伝的手記などとしてその体験の意味を探るために、以下の手続きを行った。

(1) 質問紙調査：

シニア・ジュニアの母親世代に対して、平成 21 年 7 月に、①HRL 参加児との現在の触れ合いや児に対して抱いている気持ち、②思い出として印象に残っているエピソード、③HRL とのかかわりについて、などについて自由記述を求めた。

(2) スタッフミーティング、スタッフ合宿：

研究者・スタッフについては、毎月第 3 土曜日に月例のミーティング (18:00~21:00 まで)、および平成 21 年、平成 22 年の 9 月に 1 泊 2 日の合宿 (計 2 回 参加者数延べ 25 名) を実施した。

(3) 合同ミーティング：

①子ども世代協力者との合同ミーティング：シニア・ジュニアの子どもと研究者・スタッフとの合同ミーティングを毎年 1 回 1 月に行ったほか、平成 23 年 2 月の計 4 回行った。

②スタッフ・母親・子どもとの合同ミーティング：平成 22 年 9 月に 1 回実施した。

(4) インタビュー調査

①母親世代のインタビュー：シニア・ジュニアの 6 名の母親に、質問紙調査を参考にしつつ約 1 時間のインタビューを平成 21 年から平成 22 年にかけて実施した。

②参加しなくなった元スタッフへのインタビュー：元スタッフ 2 名に約 1 時間のインタビューを平成 24 年 3 月に実施した。

(5) 中里村実施調査

中里村 (現神流町) の現状を把握するため 2 名のスタッフが現地でのヒヤリングを平成 23 年 6 月に実施した。

上記の手続きによって得られた資料のうち、(2)~(4)についてはすべて録音し、逐語記録とした。また、研究者・スタッフのうち 11 名については、各自の逐語記録を読み直し、詳細な自伝的記述にまとめた。これらの資料に基づき、生涯的縦断研究における研究者・協力者関係の変遷に関する仮説モデルを検討した。さらに、各人の中里キャンプの体験が人生移行に及ぼした影響と、人生における過去が現在・未来にもつ意味を明らかにする観点から、研究者 (およびスタッフ)・協力者それぞれの語りの共通性の内容について質的分析を行った。

4. 研究成果

(1) 研究者・スタッフにとっての体験の意味

①事例的検討：

事例 1：シニアの当初のみに参加し、2009 年に復帰したスタッフ

当初の子どもグループや中里キャンプからは、①大人の常識に抵触する子どもの行動を受け入れる驚きと戸惑いを感じつつ、子どもの行動を詳細にみる大切さを学んでいた。活動から離れてからは、②自身の子育てにおいて「禁止しない」意味を振り返っていた。そして、③シニア世代の成人式での再会では距離を感じたのに対して、40 代での再会では一瞬にして対話関係となったこと、を語り、特に 40 代での再会の意味に言及していた。

事例 2：一時の中断を除きシニアの小 3 からジュニアを通して参加し続けているスタッフ

中里キャンプからは、①ディスカッションでの沈黙には意味があり、②先入観をもちずに子どもと対峙し、③子どもを叱らないことから関係が開かれ、④子ども理解には自身の価値観が反映される、といったことを学んだ。長期に参加する過程では、⑤自身の家族関係や職場での指導のあり方への影響、⑥両世代との関係がスタッフ・子ども関係から対等な対話関係へ変容してきること、などをあげた。

したがって、いずれの事例においても、中里キャンプを中心とした子どもとの体験、その後の長期にわたる関係への進展、およびそれに基づく研究者・スタッフ自身の振り返りから、子どもと研究者・スタッフが相互に影響をおよぼし合ってきていることが伺えた。

(2) 研究者・スタッフにとっての体験の意味の共通性

個々の自伝的記述から抽出された共通性は、以下の 5 点にまとめられた。

①自分史を含めて語ることの必然性：

HRL における体験を振り返るとき、多くの研究スタッフは青年期からかかわり始めていることが、各自のアイデンティティ形成に大きな影響を受けていた。そのことは単に HRL 参加時の体験として切り取られるものではなく、必然的に自分史を含めた語りとなるのが各個人内で明確化された。

②振り返りプロセスの構造：

研究スタッフ一人ひとりの振り返りは、それぞれの生い立ちのなかで無意識的・意識的にもっていた「枠組み」を揺さぶられていくプロセスであった。それゆえに HRL 体験の意味は、各自の人生の全体性のなかで意味づ

けられ再構成された独自の言葉による語りや自伝的記述として表現されている基盤にあることが、スタッフ相互での「対話」を通して了解された。つまりHRL体験の意味は個人内から研究スタッフ間で普遍化された共通性として浮きぼりにされたといえる。

③中里キャンプの特徴の明確化・構造化：ノンプログラムであること、子どもが主であり子どもの主体的な活動を実現すべくスタッフはサポートすること、ルールといえるのは生命の危険回避のみであること、などの暗黙のルールの存在とそのルールの意味は、HRL参加時に具体的エピソードを振り返るだけでなく、その後の40年余りの人生における様々な出来事のなかで繰り返し吟味され了解され、他者存在への畏敬の念へと繋がるものであった。

④「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」とは：

これは中里キャンプを創造していく上で命題として掲げられた。「大人の心的展開」とは、子ども（相手）と関わるときに注目すべきは「子ども（相手）を感じる気づかない自分の心の動き」を省察することであり、それによってより子ども（相手）への適切なかわりを生み出す可能性が開かれることを意味している。このことは研究スタッフがそれぞれの人生において生涯問い続ける命題であり、今日的課題として注目される「親の発達」「保育者・教師の発達」に通じるものである。

(3) 親世代協力者にとっての体験の意味

質問紙調査を参考として、6名の母親世代協力者へのインタビューの結果は、以下の通りである。

①母親自身にとっての意味：以下の3点にまとめられた。

①初めての子育てで不安ななか、研究者とのかかわりから、「頼れる相手が現れた思い」(SG-Ku)、「漠然としたバックグラウンドがあるような心強さ」(SG-Ma)、「精神的な安定を得ていた」(JG-Ss)など安心感を得ていたことが明らかとなった。

②「発達状況で不安だったとき、相談にのってもらった」(JG-Wa)、「悩んだ時、アドバイスをいただき、心の支えとなった」(JG-Ss)など、研究者からの折々の助言に支えられていあことが明らかになった。

③「質問に答えることで（子育てについて）考えることができた」(SG-Ka)、「より広いところから自分、子どもを見つめる契機となった」(JG-Im)、「子どもの変化をじっくり見て

これた」(JG-Sn)など、研究者という第三者の目が加わることで自分の子育てを冷静に眺めることができたことが示された。

②母親から見た子どもにとっての意味：以下の5点にまとめられた。

①「本人が喜んでいろいろ参加していた」(SG-Ha)、「楽しい思い出を作ってもらった」(SG-Sa)、「子どもの楽しそうな様子が嬉しかった」(JG-Wa)など、とにかく子どもが楽しい経験ができてよかったと捉えていた。

②「親離れの訓練」(SG-Ka)、「（親元を離れ）自立心ができた」(SG-Si)、「親元を離れ、・・・本人に自信を持たせた」(SG-Su)など、就学前後から親元を離れてキャンプに参加することで、子どもに自立心や自信が育まれたと感じていた。

③「自然のなかでの楽しい思い」(SG-Ka)、「自然豊かなところで過ごす体験」(JG-Se)、「山や河自然のなかでの生活は貴重だった」(JG-Nt)など、実体験の乏しい都会生活では経験できない自然のなかでの生活が貴重であったと捉えていた。

④「特別な（学校でも近所の友人でもない）場所があったこと」(JG-Im)、「古澤先生を初めスタッフや友人達のかかわりを大切に思っている」(JG-Sb)、「色々な年代の方達との出会いを通して自分で考え、行動し、世界が広がった」(JG-Ss)、「その時の友人とのつながりは特別なもの」(JG-Se)など、学校でも親族でもない同年代の友達、幅広い年齢や経験のスタッフとかかわりがもてたことが、多数の母親から様々にあげられていた。

⑤「安心できる状態で自由に伸び伸びと出来た」(SG-Ta)、「思う存分出来た」(SG-Su)、「『自由』に振るまえた」(JG-Ny)、「自由なキャンプ」(JG-Tm)などであった。

したがって、我々が意図した「子どもが自分らしく自由に過ごせる」キャンプ生活であったことを母親も感じとっていたと見られる。

(4) 子ども世代協力者にとっての体験の意味

自伝的記述にも個別の語りにも、各々にとっての独自のHRL体験が表現されていた。今でも何かの折に、中里村の空、風、神流川の川音、空気を生き生きと感じて自分の体験した出来事や誰が何をしていたかを詳細に覚えている人がいる一方で、遠い昔のことでぼんやりとしか思い出せない人も見られた。

個々の自伝的語りや自伝的記述から抽出された共通性は以下の5点にまとめられた。

①制限なくやりたいことができる場：

HR Lが、豊かな自然のなかで、子ども達のやりたいことをできる限り実現することを大切にしたいキャンプであった点があげられる。子ども達は都会の日常を離れ、テレビもゲームもなく、親の目からも学校からも解放され、ひたすらやりたいことをやりたいだけした。自分の足で歩き、目で見、手で触れる実体験を重ね、「行きたい」「やりたい」と言えば、それがたとえ一人だけでも実現させてくれる大人に囲まれ、自分が認められ、尊重された体験としてとらえられている。

②常識を押しつけず、寄り添ってくれる大人：我々スタッフは、「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」という命題の下、瞬間、瞬間の子どもとのかかわりを省察するよう努めてきた。子ども達にとってスタッフは普通の大人ではなく、決して怒らず、常識を押しつけず、共に遊び、冒険し、時に寄り添ってくれる存在であった。先入観なく自分のありのままが認められる感覚をもてたようである。

③太い絆でむすばれた特別な仲間達：思春期を迎えた子ども達は大人を排除し、互いの絆を急速に深めていった。HR L体験を共有している仲間達は、学校の友達とは違う各々にとってかけがいのない存在となっている。何年隔たりがあっても、再会した瞬間に打ち解けられる、何の打算もない、認め合える仲間と認識されている。

⑤それぞれの人生のなかでHR Lは生きている：「子どもに伝えたいことは、全て中里村から学んだ」(SG. KK)、「あの時感じた自由感や達成感が、ぼくの心の尺度になっている」(SG. NM) というように、各々にとって中里村で過ごした時間、スタッフや仲間とのかかわりは大きな意味をもち、人生の指針となっているという。

以上のように「子どもらしい子ども時代を体験すること」「子どもにかかわる大人自身のあり方を吟味し続けること」を目指した我々の試みは、協力母子の内で確かな意味をもち、次世代に受け継がれているといえるだろう。

(5) 中里村の自然がもたらす体験の意味

HR L (中里キャンプ) 体験の意味の振り返りにおいて、多くの子ども世代協力者から自然との触れ合いが語られた。そこで中里村(現在は神流町)の自然環境について、当時の環境がもたらす体験の質を確認するために、2名の研究者・スタッフによる実地調査を平成23年6月に実施した。中里キャンプを実施していた当時の宿舎跡地には集合住

宅が建てられ、地域の小学校と中学校は隣町の小中学校との統廃合がなされていた。一方、川遊びの拠点であった2箇所(河原)などの自然は川幅や深さ、流れの速度の違いはみられるものの、そこに広がっていた。そして、その場に立つと、当時の子どもとスタッフとの具体的なエピソードが臨場感をもって詳細に思い起こされた。すなわち、自動的にHR L体験が振り返られたことから、自然環境がそこでの体験の質・意味を強く規定していることが推察された。

(6) 参加しなくなったスタッフにとってのHR L体験の意味

研究者・スタッフがHR Lに参加しなくなった理由はさまざまであるが、現在、臨床にかかわっている元スタッフ2名のインタビューからは、HR Lにおける体験は、①臨床の仕事に取り組むきっかけになったこと、②自身の子育てにおいてHR Lで丁寧に吟味されたことに助けられたこと、などが語られた。したがって、さまざまな事情でHR Lに参加できなくなり物理的距離を置く一方で、HR Lの体験内容については、物理的距離を超えて深いところで心理的・精神的繋がりとして生き続けていたことが明らかとなった。

(7) 全体的考察

協力者母子を研究対象として第三者的に見ることから脱し、研究者・協力者がかかわり合うなかで互いの成長を図るという生涯的縦断研究への転換は、協力者母子それぞれにも了解され、多様な意義を感じ、意識していた。活動の柱であった中里村のノンプログラムキャンプでは、日常と異なる時空間で、子ども一人一人が大人に大切にされ、「真に子どもらしい体験」が実現でき、それを母親も感じとり、子どもとのかかわりをより自覚的にしてきたのではないかと考える。各家庭の親子関係同様、研究者・協力者関係も、長期にわたり人間対人間のかかわりが積み重ねられ、現在は本研究に関わるSG・JGの親・子両世代、研究者・スタッフの第一・第二両世代全ての人々に相互に対等な対話関係の構築が出来つつあるといえよう。

したがって、生涯的縦断研究モデルが実証されたといえる。すなわち、第1段階である研究者と協力者(母親)の出会い研究者・協力者関係から、子どもの出生により第2段階である協力者への支援を考慮した関係が子どもの乳幼児期から児童期・思春期頃まで続いていった。その後、子どもが受動的協力者であることに疑問をもち、彼らなりの吟味を

経て、HRLに参加していることの積極的な意味に自覚し受け入れるに伴って、協力者への支援を考慮する程度は漸減していった。そして子どもが独立し子ども世代による子育てが開始されると、HRL体験の振り返りが自発的にそれぞれの生活のなかで行われるなど、第3段階：研究者・スタッフ、母親、子どもそれぞれが対等な対話の関係へと進展していった。

これらの結果から、第3の目的である、今日の子どもの発達を保証するためには、HRL（中里キャンプ）における体験の質、すなわち、「自然体験」「やりたいことを自分でみつけだす体験」「常識を押しつけずにありのままのありようを受容してくれる大人との生活体験」が大切であること、また、環境のあり方としては、最低限のルールのもとで、子どもの創造を創出させるシンプルな物理的環境であり、そこには自然が含まれることが重要であると結論する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計4件）

- ① 藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析 その3：研究スタッフにとっての体験の意味の共通性・独自性 2012年3月10日 日本発達心理学会第23回大会（発表論文集 494.）
- ② 杉本真理子・藤崎真知代・石井富美子 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析 その4：子ども世代協力者の体験の意味 2012年3月10日 日本発達心理学会第23回大会（発表論文集 495.）
- ③ 藤崎真知代・古澤頼雄・杉本真理子・石井富美子 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析 その1：研究スタッフにとっての体験の意味 2011年3月26日 日本発達心理学会第22回大会（発表論文集 388.）
- ④ 杉本真理子・古澤頼雄・藤崎真知代・石井富美子 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析 その2：親世代協力者の体験の意味 2011年3月26日 日本発達心理学会第22回大会（発表論文集 389.）

〔その他〕

報告書

- ① 藤崎真知代・杉本真理子（編著） 40年にわたる生涯的縦断研究（HRL：中里キャンプ）を振り返って（Ⅱ）－研究者・スタッフにとっての体験の意味 2012 54.
- ② 藤崎真知代・杉本真理子（編著） 40年にわたる生涯的縦断研究（HRL：中里キャンプ）を振り返って－研究者・スタッフにとっての体験の意味 2011 124.

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤崎 真知代 (FUJISAKI MACHIYO)
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：90156852

(2)研究分担者

杉本 真理子 (SUGIMOTO MARIKO)
帝京大学・教育学部・教授
研究者番号：70130010

(3)連携研究者

石井 富美子 (ISHII TOMIKO)
立正大学・副学長
研究者番号：00060682

(4)研究協力者

中村 美津子 (NAKAMURA MITSUKO)
帝京大学教育学部 非常勤講師

小林順子 (KOBAYASHI JYUNKO)
国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センター小児精神衛生相談室

鈴木 晶子 (SUZUKI AKIKO)
江戸川区立船堀幼稚園